広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | ユキ（雪）に関する語彙 ： 下津井の（ある個人の）言語体系から |
| Author(s) | 十河，直樹 |
| Citation | ニダバ，4 ： 11 - 22 |
| Issue Date | 1975-03-31 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050960 |
| Right | |
| Relation | |

# ユキ（雪）に関する語彙

## ―下津井の（ある個人の）言語体系から―

十河直樹（そごうなおき）

## 1　はじめに

―1　語彙の調査をしていて、一人の人を対象に、その人のすべての語彙を採集し得たらなんとすばらしい事であろうか。そういう研究は不可能な事であろうか。仮にできるとしたらどれくらいまで可能な範囲となるであろうか。そしてそう言う研究をする対象者や対象地をどこの誰にしたらよいものか。つい五、六年前まで迷っていた。

一人の言語は、語彙数としてはいかほどあろうか。その人の呼称する言語とその地域との関係はどの様な要素や諸相をみせるであろうか。私はそう言う疑念を抱いたまま、この研究をするにあたった。

また、この研究の動機は、柴田　武（東京大学教授）先生のご指導のもとに、昭和45年2月から研究しているものの一つである。

―2　ここでは、ユキ（雪）に関する語彙について、調査したものを報告する。

## 2　対象地及び対象者等、選定した理由

―1　下津井は方言島

江戸時代、瀬戸内海は海運業者にとって重要な海通路であった。この南北にあたる四国・中国地方の対岸の良港は非常な栄え振りを見せた。北前船のよる良港では、産業と比例して文化が高尚化したのである。

しかし、その夢は長くつづかず、年号が江戸から明治に変って間もなく、中国路に鉄道が敷設されてからは、港の行燈も消えかかり、大正時代から昭和にかけては、あれはてた漁村と化した。年来の豪商の跡を偲のばせる棟や、瓦屋根が過去の美を寒風の中に明確に見せつけるのは、あたかも当時のなごりを未練がましく見せつけるかの様である。

細い蛇の様に曲った一本の道。二キロはあろうかその町のたたずまいは。江戸時代の様を如実に語りかけている様でもある。

その町の中の人の言語に味がある。その世界で生活している人々は、海で生活をささえた人であった。海は漁師にとって、生活の原点であり、その生活と人となりは、まさに、自然と調和した生活であったのである。しかし、下津井の人々はあの栄華を偲ばずにはおれないあわい夢を何

十年もの間求めて生きた。それが言語の中にあらわれている。多くの人々は、その言語を、いやしい言語と思いつつ何年もの間消して生活してきたものもいた。しかし、容易にそのなごりを消えさせることはできなかった。

－2　下津井は岡山県の最南端に位置し文化の面では、対岸四国丸亀などの影響がつよい。今にそのなごりは厚く、通婚関係も丸亀の人との間に行なわれている。

－3　さらに、この下津井を選んだ理由には外にもあって、まず、江戸時代よりの言語生活が今に残存している点、それに、いわゆるはえぬきの住民が多く、人の移動がほとんどない。そして、言語そのものは、中国地方である地域であるのに、この下津井だけが関西方面のなごりを今にとどめ、その言語の諸相の中に、妙味を知れること。

－4　つぎに、一個人について。この一個人を選択するのには多少とも考え方を変えた。従来、いわゆる当地の「はえぬきの人」と言う条件ではかなりの欠かんがあるのではなかろうか。つまり「はえぬきの人」と言う条件では、①その人一代のはえぬきと言う条件と②すでに祖父の時代からその土地に住みついているはえぬきという条件では語彙の面に多少なりとも差異がでるのではなかろうか。実はそう言う条件もふくめて、下津井田の浦地区に在住の、石田源吉氏（75歳）を対象に選んだ訳である。すなわち、

| 職　業 | 氏　名 | 年　令 | 家族構成 |
|---|---|---|---|
| 漁師（一本釣り） | 石田源吉 | 75歳 | 夫婦　息子親子（4人） |
| | 明治32年1月8日生 | | 計　6人 |

－5　この地（下津井）石田家は五代つづいている家で、当初より漁師として現在までに至っている人である。

## 3　使用雪名彙（と理解雪名彙）

－1　ユキ　ワ　フランナー」（雪は降らないなあ）と石田氏は言う。地理的、地形的な条件もあって、さらには気象条件から見ても、瀬戸内は暖い地帯である。その地域に、まったく雪が降らないわけでも、積もらない訳のものでもない。

ここでは、一漁師である石田氏の知っている、理解している語（名称）あるいは、現実に見たり、触れたりしたことのある雪、その名称（語）のすべてを記載する。

表1.

／ユキ／ボタンユキ／オーユキ／コユキ、コナユキ／ミゾレ／ヒョー／ユキバナ／アラレ／ハツ

ユキ／

（ネユキ／カザハナ／ザンセツ／

10（3）称

－2　この表1から、降らないと言った地域の住民ですら理解様まであわせると十三称まで知っている。ただこの語彙の世界には、ネユキ（根雪）とか、ユキシグレ（雪しぐれ）と言う様な名称がない。雪国の人が聞くと語の少ない点と、いわゆる標準語形の多い点に注目できそうである。さらには、雪の種類という面から見ても特色のある名称はありそうにない。ただ一称、ユキバナ〔jukibana〕は当地の俚言と称することのできる名称である様だ。

－3　つぎに、呼称した順序について考察してみると、まず雪をユキ〔juki〕と総称している。その後、ボタンユキ〔botanjuki〕がつづいている。この雪は一年に一度降るかどうかと言うきわめて希有としか見ることのできない雪で、まず石田氏の脳裏には印象強く残っていた雪と思われる。オーユキと言う名称はかなり意味が重なってある様で、そのつぎに呼称したコユキ、コナユキという二称とも対立している。そして、ミゾレ　ト　ユン　カナー」と少し不安な顔つきでもらしたミゾレという名称にはさしたる自信がある様ではなかった。つづいて、ヒョーこれもかなり意識的で、ユキバナはそれらの本質の異いについて呼称した名称であろう。アラレはヒョーの大きいものであることを知っていた。そして、今度は、雪の降る時期と言う面からハツユキと言う名称をあげたのである。

－4　これらの名称はユキという名称の中に組入る名称であって、その外観からフルモン（降るもの）と言う表現をツメタイ（冷めたい）と言う表現とで共通している。

## 4　雪名彙の（微細）分類

－1　表1で、石田氏の呼称した使用雪名彙についてのみ分類すると、

| Ⓐ(一) juki | | 動詞表現 | | | | 音形 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 降る | 舞う | 散る | ○の数 | (一)ki | 一名詞 | ※形体 | 程度 | 標準語形 |
| ①②コ(ナ)ユキ | 小(粉)雪 | ○ | ○ | ○ | 3 | ○ | | ⊖ | ◤ | ○ |
| ③ユキ | 雪 | ○ | ○ | × | 2 | ○ | | － | ▼ | ○ |
| ⑥ユキバナ | 雪花 | × | ○ | ○ | 2 | | ○ | ⊖ | △ | × |
| ⑦オーユキ | 多雪 | × | × | × | 0 | ○ | | ＋ | ◉ | ○ |
| ⑤ボタンユキ | ぼたん雪 | ○ | × | × | 1 | ○ | | ＋ | ◉ | ○ |
| ④ハツユキ | 初雪 | ○ | × | ○ | 2 | ○ | | － | ◉ | ○ |
| | ○の数 | 4 | 3 | 3 | 10 | | | | | |

※ 平たくて大きいもの ＋ よく見かける ◤
球形で小粒のもの － 見かける ▼
球形で大粒のもの ⊕ あまり見かけない ◭
平たくて小さいもの ⊖ ほとんど見かけない ◉
ほとんど形体をなさないもの ×

| Ⓑそれ以外 | | 動詞表現 | | | 音形 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 考える | 当る | ○の数 | －re | その他 | ※形体 | 程度 | 標準語形 |
| ⑧ ヒョー | 雹 | ○ | ○ | 2 | | ○ | ⊕ | ◉ | ○ |
| ⑨ アラレ | 霰 | ○ | × | 1 | ○ | | － | ◉ | ○ |
| ⑩ ミゾレ | 霙 | × | × | 0 | ○ | | × | ◭ | ○ |
| ○の数 | | 2 | 1 | 3 | | | | | |

－2　この分類表Ⓐ㈠juki　Ⓑそれ以外の二つは、先の使用雪名彙を、語形の面に焦点をあてて、語尾に－ユキ（－juki）と付加しているものとそうでないものとに分けた。この場合、ユキ（雪）もⒶの類に組入れた。

その後、その語が日常どの様に表現されているか、そう言った面にスポットライトをあてて分類をした。これは一語一語を微細な面に注意して分析したものである。

ところで、ユキ（雪）と言う標準語形に特別によせた理由は、石田氏のカテゴリーであるユキ（雪）と言う世界にどれだけの名彙を内包しているのであろうか。それは、下津井と言う古い港町とあわせて、内海に面した漁民の特徴的なものの見方がありはしないか。

つまり、めった雪など見ることのない土地で、現代の生活者（若年層らを対象に）との間になんらかの接触があり、それによる反応と言うか影響が投影されているのではなかろうか。そう言う疑念があったからである。

－3　標準語形は、使用雪名彙の内9／10称（語）までがしめている。いわゆるそれ以外の語形（俚言と言ってよい）は、ユキバナの一称（語）だけである。実は、このユキバナと言う名称の中に多くの疑問とか意味の厚さと言ったものをふくみこんでいるのではないのか。と思える。

この点については、一語一語の説明のときにも詳細に解明する。→⑥

－4　つぎに音形からみた。Ⓐ表の場合は、㈠ki、と－名詞との二つに分けられそうで外に分けられるかも知れないが一応ここでは、そこまでにとどめた。Ⓑの表の場合は、－re と言う音の語尾にくるものが二語ある。ヒョー〔 çjo: 〕は、語形の上からも、要素の上からもまったく別の物である様な気もする。石田氏は言う。

－5　そこで、今度はユキ（雪）の形体の面について五段階に分け、石田氏によって分けてもらった。Ⓐ表の十称(語)についてはかなり統一的であるのに対し、Ⓑ表の三称（語）については、実にまちまちである。本質的な面についてはしらべてはないが、その点にも意味はあろう。

－6　そして、そのものを見かける頻度差（程度）について分けた。これは、それぞれの雪（類）になんらかの関係で会っていれば、名称の点に変化があったのではなかろうか。そう言う点を考慮に入れて分類した訳である。

なお、動詞表現を基準にして、共通する表現の多いものから順に番号をつけておいた。以後、番号の順に一語一語の説明を追って述べてみたい。

## 5　語の説明

Ⓐ<①②③④⑤⑥⑦>　　七語

①コユキ〔kojuki〕、②コナユキ〔konajuki〕 いわゆる粉雪（こゆき）及び小雪を指して称する。

まず、頻度の面から見て、コユキ>コナユキを頻用する。コユキガチラツキョール」（粉雪がちらついている）と言う様に称する。この様な場合、コユキとコナユキとの使い分けは明確である。すなわち、コナユキ　ワ　ベトベトシトル」（粉雪はべとべとしとる）と言う様に称する。コユキ　ワ　サラット　シトル」（粉雪はさらりとしている）と言う様に表現する。この表現からコユキとコナユキとは別の雪を指しているのではないかと思える。しかし、コユキもコナユキも同一の雪を指していることがつぎの表現で解かる。

コユキ　ガ　チラツク」または、コナユキがチラツク」（粉雪が散らつく）と言う様に表現する。この様に見ると、やはり指している雪は同一のものである。

ところで、二称ともに標準語形をしている。コユキは小雪を指していたのであろう。そして、コナユキは粉雪を指していたのであろう。ところが、雪の降っている現象がちょうどメリケン粉を散りばめた様な現象になったので、その意味の点に於て似た現象があり、コユキもコナユキも同一の粉雪を指す様になったものと思う。

さらには、小雪を指して、コユキ、コナユキとも言う。

キョー　ワ　コユキ　ジャ」（今日は小雪だ）

とは表現しても、

キョー　ワ　コナユキ　ジャ」（今日は粉雪だ）

とは表現しない。

この点で、やはり、無意識ではあるが、はっきりと区別した使い分けをしている。

つまり、コユキと言う呼称の中に少なくとも二つ以上の意味があると言えそうである。その一つは、小雪も粉雪を指してもコユキと称する。そしてもう一つは、いわゆる小雪を指してコユキと称する。また。コナユキの意は、いわゆる粉雪を指して称すると言える。それを表示すると右の様になる。

| | 粉雪 | 小雪 | ○の数 |
|---|---|---|---|
| コユキ | ○ | ○ | 2 |
| コナユキ | ○ | × | 1 |
| ○の数 | 2 | 1 | 3 |

ほとんど二称ともに無制限に使われている。ほとんど常称で、意識してもしなくても雪の降ることが少ないので明確でないと言うことも理由の一つになる。二月から三月ごろ一、二回降ることがあろうか。

| | |
|---|---|
| いわゆる頻用　若い層に於てはコナユキとの使い分けがある。 | コ　ユ　キ |
| あまり使わない。意識的、主に老人層に於て呼称 | コ　ナ　ユ　キ |

③ユキ〔juki〕　いわゆる雪（ゆき）を指して常称する。また、総称する。語形は標準語形である。ユキ　ガ　フル」（雪が降る）、ユキ　ガ　ツモル」（雪がつもる）、また、名詞について、ユキダルマ（雪だるま）、ユキガッセン（雪合戦）、また、動詞について、ユキドケ（雪溶け）、副詞と接続した形でフワフワシタユキ（ふわふわした雪）、ベタベタシトルユキ（べたべたした雪）、ザリザリシタユキ（ざらざらした雪）と言った表現もある。また、ユキトアメ（雪と雨）、ユキノアサ（雪の朝）、ユキオフクンダカゼ（雪のまざっている風）、ヤネノユキ（屋根の雪）、ユキノヨーナハダ（雪の様な肌）と言う様な句を使う。

雪は降っている現象を指して、アッ　ユキ　ジャ」（あっ雪だ）と表現するが、夜の内に降りつもった雪を見てユキ　ジャ」とも言う。雪をユーキ〔ju:ki〕とは言わない。

そして、雪の本質を表現して、ユキ　ワ　ツメタイ」、ユキ　ワ　トケル」、ユキ　オ　カム」、ユキ　ワ　フル」、そして、ユキ　ワ　ツモル」、また、ユキ　ワ　ノコル」と言った表現もする。

一年の内に一、二度降るであろうか。子供は遊び、戸外で雪ダルマを作る。大人には、別に儀式とか伝承と言ったものはないと言う。ユキ（雪）の降った日は風がなく、室内は、思いの外暖かい。年によって異うが、五、六年前に、二十一年ぶりの大雪があって、三十センチメートル程積ったこともある。雪の積った日は漁に行く。

つぎに、コ（ナ）ユキとの意味の差異を表示しておく。

| | 総　称 | 特　殊　称 |
|---|---|---|
| 風のある日で寒く、いわゆる一、二月頃降る二次的称 | ユ　キ | コ（ナ）ユ　キ |
| 風のない日で冷めたい月、二月～三月の初めごろ降る | | ユ　キ |

④ハツユキ〔hatsujuki〕　初雪（はつゆき）を指して称する。すなわち、その年になってはじめて降った雪を指して称する。積るとか積らないと言うことには関係しない。初雪を単にユキガ　フリヨール」（雪が降っている）と言う様に呼称することもある。ハツユキ　ワ　オーユキニ　ナラン」（初雪は大雪にはならない）と言う様に称する。ハツユキ　ワ　タイテー　ユキバナ　テード　ジャ」（初雪はたいていかざはな程度である）と言った呼称はする。

語形の構造から見て、標準語形である。

次に、ハツユキとユキバナの頻用の点からの差異とハツユキ、ユキバナ、コ（ナ）ユキ、四称の別の差意を表示してみる。

| 総称 | 特殊称 | |
|---|---|---|
| ユキ | 希有称 | ハツユキ |
| | 頻用称 | ユキバナ |

| | 飛ぶ | オーユキ | ○の数 |
|---|---|---|---|
| ハツユキ | × | × | 0 |
| ユキバナ | ○ | × | 1 |
| コ(ナ)ユキ | × | ○ | 1 |
| ○の数 | 1 | 1 | 2 |

⑤ボタンユキ〔botanjuki〕　牡丹雪（ぼたんゆき）を指して称する。この雪はめったに降らない。しかし、この雪が降ると、ボタンユキ　ニ　ナッタ　ツモル　カモ　シレン」（牡丹雪になったつもるかも知れない）と言う様に表する。この雪を単にユキと呼称することはあっても、オーユキとか他の名称で言うことはない。また、ボタユキとか、ベタユキと言った別称もない。ボタンユキ　ノ　フル　ヒ　ワ　カゼ　ガ　ナイ」（牡丹雪の降る日は風がない）とか、ボタンユキ　ワ　ワタノ　ヨーナ　ユキ　ジャ」（牡丹雪は綿の様な雪だ）と言った表現もする。

語形の構造の点から見ると、標準語形である。別称はなく、ボタンユキが牡丹雪と意味の点で共通する点は、ボタンユキ　ガ　トブ」（牡丹雪が飛ぶ）と言う様な表現をしない点にもある。ユキ　ワ　ツモル」と表現するが、ボタンユキ　ワ　カナラズ　ツモル」と表現できると言う。また、ボタンユキ　ワ　ニガツゴロ　ニ　フル」（牡丹雪は二月頃降る。）と言った表現などで、石田氏の使うボタンユキに関する意味の範囲は、いわゆる牡丹雪を指すが、風のない日の二月(頃)に降るものを指すと言える。

そして、ボタンユキ　ワ　ニッチュー　フラズニ　ヨル　フルコトガオーイ」（牡丹雪は日中降ることなく夜(分)に降ることが多い）と言った表現をする。

ボタンユキをボタンと語尾を簡略させた呼称のしかたもしない。ボタン（牡丹）とユキ（雪）の二次的称。漁師、一般人ともに使う。余り頻用しない。

ボタンユキ　ニ　ナッタラ　ツモル　デ」（牡丹雪になったらつもるぞ）

| | 総　　称 | 特　殊　称 |
|---|---|---|
| 一つ一つの雪が花びらの様な形体・「シズカニ　フル」と表現 | ユ　　キ | ボタンユキ |
| 一つ一つの雪が粉の様な形体・「ドンドン　フル」と表現する | | コ(ナ)ユキ |

⑥ユキバナ〔jukibana〕　いわゆる風花（かざばな）を指して称する。下津井では、カザバナ〔kazabana〕、カザハナ〔kazahana〕などとは言わない。し聞かない。「ユキバナ　ガ　チル」（風花が散る）と言った表現は、一冬の間によく耳にするし、口にすると石田氏は言う。風のある日に降っている雪と推すことができる。ユキバナ　ガ　チリヨール　サーブイ　ハズ　ジャ」（風花が散っている寒いはずだ）と言う様にである。

語形の構造は標準語形ではない。いわゆる俚言である。しかし、ユキバナに対立する名称としてはコユキがある。すなわち、コユキ　ガ　チラツク」、または、コユキ　ガ　チラツク」と言う様に表現する点では共通する。しかし、ユキバナ　ガ　フル」（風花が降る）とは表現しない。この点で、雪の本質的な面にふれていることが解かる。すなわち、この雪は軽い。しかも、風のある日に風にまじって降る現象を指す。

ユキバナ　ワ　カルイ」、ユキバナ　ト　カゼ」、ユキバナ　ノ　チル　ヒ　ワ　サーブイ」と言う様に表現する。

ところで、ユキバナの語はユキ（雪）とハナ（花）との二つの名詞が複合してできた語で二次的称であるが、ハナユキと言う様な名称はないし、まず、雪と雨との異いと言う点に焦点をあてていることがうかがえる。雪が花（びら）の散りかけている様に似ている。その花も桜か梅ではなかったろうか。そう言った点に注意して石田氏にたずねていくと、キサラギ　ノ　ユキバナ　ワ　ハリデサス　ヨーニイタイ」（二月（に降る）風花は針でさす様に痛く感じる）と言う。春風にのって舞うと言った表現として身がひきしまる。

ユキバナの降る日は北の岡山、あるいは県北に雪の降っている時で、対岸の四国山脈にもツモル（積る）と言う。

ユキバナとは一般人も頻用し、常称する。意識するしないにかかわらず使う。

ユキバナ　ワ　イタイ」（風花は痛い）

| | |
|---|---|
| 風の吹いている中にわずかに散る雪 | ユキバナ |
| 風はあるが雪が主体、かなり降る雪 | コ(ナ)ユキ |

| | 風 | 雨 | 冷めたい | ○の数 |
|---|---|---|---|---|
| コユキ | ○ | × | × | 1 |
| コナユキ | × | ○ | × | 1 |
| ユキバナ | ○ | × | ○ | 2 |
| ○の数 | 2 | 1 | 1 | 4 |

⑦オーユキ〔o:juki〕　〔oojuki〕とは言わない。いわゆる雪の降り方がはげしく降っている現象を指して称する。また、雪が降った後、かなり降り積った時などに称する。オーユキ　ニ　ナル」(雪がたくさん降りつもる)。したがってオーユキは大雪を指し称する。すなわち標準語形である。

ところで、オーユキ　ノ　ヒ」(大雪の日)とかユキ　ノ　ヒ」(雪の日)と言った表現をする。これらの場合は、雪の降り積ったその現象を指して表現している。しかし、オーユキ　ガ　フル」(大雪が降る)と言った表現をしない。ユキ　ワ　フル」(雪は降る)と言った表現との異いはここにもある。また、ユキ　ガ　チラツク」とか、コユキ　ガ　マウ」と言った表現をしても、オーユキ　ガ　チラツク」とか、オーユキ　ガ　マウ」と言った表現はしない。

オーユキ　ノ　ヒ　ワ　ツメタイ」、オーユキ　ワ　メッタ　ニ　フラン」、オーユキ　ワ　ナイ」と言った表現もする。

オーユキ　ワ　カゼ　ノ　ナイ　ヒ　ニ　フル」、ボタンユキ　ニ　ナッタラ　オーユキ　ニ　ナル」この二つの表現から、非常にボタンユキとオーユキとの間に関係がありそうである。

表示すると、

| | |
|---|---|
| 主に降ったものを指す・雪の全体的に対する名称・量的称 | オ　ー　ユ　キ |
| 主に降っているものを指す・雪の一つに対する名称・なぞらえ称 | ボタンユキ |

また、

| | |
|---|---|
| 主に降っている現象がまばらなものを指す・はげしくない。ほとんどつもらない | コ(ナ)ユキ |
| 主に降っている現象が緻密で量的に多いものを指す・はげしく降る・かなりつもる | オ　ー　ユ　キ |

ところで五年程前に大雪の降った日があった。その日は、港が雪で白くなった。とも言った。

Ⓑ＜⑧⑨⑩＞　　三称

⑧ヒョー〔çjo:〕　雹(ひょう)を指して称する。ヒョー　ワ　フル」とも表現するが、ヒョー　ワ　オチテクル」とか、ヒョー　ガ　パラツク」と言った様な表現をする。雹は、ヒョーと言って、ヒヨー〔hijo:〕とは呼称しない。

この雹に関する他の表現には、ヒョー　ガ　バラバラ　ユーテ　フル」とか、ヒョー　ワ　ナツ　ニデモ　フル」、また、ヒョー　ニ　アタッタラ　イタイ」、と言った表現もする。

標準語形と変りはない様であるが、ヒョー　ワ　フイ　フラン」(雹は冬降らない)と言った表現から、外の語の表現と明確に差異がある。また、語そのものの形も他の二語が語尾に－reが付いているのに対し、このヒョーには付いていなく、また、－jukiともなってはいない。

石田氏は、初めコーリ（氷）の類に組入れたりもした。しかし、フル（降る）と言う一点の表現で、やはりユキ（雪）の類に組なおした。

ヒョー　ノ　ヒ」（雹の日）とか、ヒョー　ノ　フル　ヒ」（雹の降る日）と言った様な表現はしない。

⑨アラレ〔ararе〕　霰（あられ）を指して称する。アラレ　ワ　フル」（霰は降る）と言った表現をするが、アラレ　ニ　アタル」（霰に当る）と石田氏は表現しない。アラレ　モ　ヒョー　モ　アンマリ　フラン」（霰も雹も余り降らない）と言う表現から、ユキ（雪）と変りないと言える。

標準語形で、別称もない。語尾がーre となっており、その点ではミゾレ〔mizore〕のーre と共通する。

ところで、アラレ（霰）もヒョー（雹）も、ミゾレ（霙）もツモル（積る）と言う動詞の表現にはつづかない。アラレ　ノ　ヒトツブ」（霰の一粒）と言う様に一粒をヒトツブと言う。サブイ　トキ　ニ　ワ　オチン」（寒い時には落ちない）と言う様に表現する。

また、アラレ　ノ　ヒ」（霰の日）と言う様な表現をしない。その点で長時間降ると言う様なものではない点を知れる。

アラレとヒョーとの差異は、

| | |
|---|---|
| 季節の変りめの時に降る・小粒・雨とまざりミゾレとなる・すぐ溶ける | ア　ラ　レ |
| いわゆる夏季に落ちる・大粒・バラバラと音たてて落下し固く痛い | ヒ　ョ　ー |

⑩ミゾレ〔mizore〕　霙（みぞれ）を指して称する。ヒョー、アラレにつづいて一次的称である。ミズレ〔mizure〕とかミソレ〔misore〕と言った様な呼称はしない。したがって別称はない。ミゾレ　ワ　ヤヨイ　ニ　フル」（霙は三月頃降る）、ミゾレ　ワ　キタナイ」（霙はきたない）と言う形容詞をともなう表現をする。ユキ　ガ　ミゾレ　ニ　ナッタ」（雪が霙になった）とも表現する。ところが、アラレ　ガ　ミゾレ　ニ　ナル」とは言わない。ミゾレとアラレとはーレと言う点で共通している。このーレは雨と関係している様に受けとれる。

また、語形の面から見て、ミゾレは標準語形である。ミゾレ　ノ　フル　ナカ」、とか、ミゾレ　ノ　ナカ」と言った表現もする。この点ではユキの表現とも共通する。しかし、アメ　ノ　ツブ」と表現するが、ミゾレ　ノ　ツブ」とは表現したことがない。ユキ　ワ　シロイ」と表現しても、ミゾレ　ワ　シロイ」とは言わない。この様に、ミゾレはユキの世界に組入ってはいるが、アメ（雨）に近い。どうも霙をユキの中に組入れた理由は、次の表示のごときである。この名詞、形容詞、動詞につづいて表現する形から、粒状ではなく無色で多量に降ってはこないもの

であると言える様である。

| | 白い | 粒 | 落ちる | ○の数 |
|---|---|---|---|---|
| アメ | × | ○ | ○ | 2 |
| ミゾレ | × | × | × | 0 |
| ユキ | ○ | × | ○ | 2 |
| ○の数 | 1 | 1 | 2 | 4 |

アラレとの差異を表示すると、

| | |
|---|---|
| いわゆる粒状のもので季節の変りめの様な時に降る、氷っている | アラレ |
| アラレ（霰）に限らずユキ（雪）などと雨の混ったものを指して称す | ミゾレ |

漁師に限らず、一般人もミゾレを使う。公式の場所に限らないどんな時にでも使う。したがって意識、無意識には関係なく使う。

## 6 まとめ

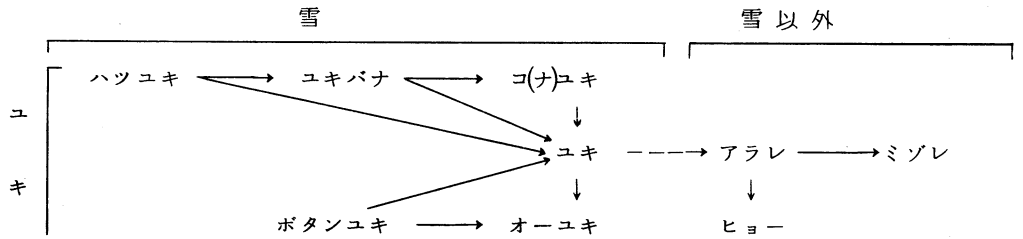
－1 石田氏の使うユキ（雪）に関する語いは、十語あった。この十語について、微細に分析整理していく途中で、すでにⒶⒷ二つに分けた表を一つの表にして示すことが可能である点に気づいたのである。

そこで、その表を次に示す

| 漁師（石田）称 | | | | | | | | | | 総称 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| やわらかい | 小さい | 雪 | （粉雪） | コユキ | (一)juki | 降る | 舞う | 標準語語形 | | ユキ |
| | | | | コナユキ | | | | | | |
| | | | （雪） | ユキ | | | | | | |
| | 大きい | | （初雪） | ハツユキ | | | 舞わん | | | |
| | | | （牡丹雪） | ボタンユキ | | | | | | |
| | | | （大雪） | オーユキ | | 降らん | | | | |
| | 小さい | | （風花） | ユキバナ | | | 舞う | それ以外 | | |
| 固いやわらかい | 大きい | それ以外 | （雹） | ヒョー | それ以外 | 降る | 舞わん | 標準語語形 | | |
| | 小さい | | （霰） | アラレ | | | | | | |
| | | | （霙） | ミゾレ | | | | | | |

また、ユキと総称しているわけではあるが、それであるとすると、ユキ（雪）という名称に関係して一連の系譜ができるのではあるまいか。それを示したものが次の表である。

ユキに関する系譜




※ ―――→ は直接には関係がない。

－2　今までの分類を整理して考えられるユキ（雪）に関する系譜は上に表示した通りになる。この系譜からユキを中心にして上に並ぶ四称は風や時期に密接な関係がある。それに対し、ユキより下に並ぶ三称は一つ一つあるいは全体を総括した表現であると言える。

表をたてに見て、要素上より、雪とそれ以外とに分けられる。雪を七称で言い表わしており、それ以外は三称で言い表わしている。

－3　結論から言って、石田氏が、要素の点から見て雪以外のものについても、ユキと称するその根底には何があるか、それはユキ（雪）がフル（降る）というものである点。二つめがシロイ（白）ものであり、三つめがツメタイモン（冷めたいもの）と言う点であろう。そして、部分的には次の表の通りとなる。

| 語形分類 | | 要素分類 | 名彙 | 動詞分類 |
|---|---|---|---|---|
| ユキ | (一)juki | 寒い日、風と関係して降る | コユキ | 降る／舞う／散る |
| | | | コナユキ | 降る／舞う／散る |
| | | | ハツユ | 降る／舞う／散る |
| | | | ハツユキ | 降る／舞う／散る |
| | | | ユキバナ | 降る／舞う／散る |
| | | 寒冷な日で風がなくやがて暖かくなる | オーユキ | 降る／落ちる |
| | | | ボタンユキ | 降る／落ちる |
| | それ以外 | | ミゾレ | 降る／落ちる |
| | | 氷状のもので粒になっている | アラレ | 降る／落ちる／当る |
| | | | ヒョー | 降る／落ちる／当る |

（1974.12.23記）